



薬師寺東院堂観音菩薩立像  
(聖観音) 頭部 (1962)



宮野浦の渡し舟 (1957)



原爆ドーム (1957)

土門拳の  
畢生。



東大寺 蓮  
(1967)



火焰型土器詳細 (1963頃)



「肉体に関する八章」第一章  
美しき薔薇にとげありといへど (1948)



おろち (1965)



「一谷嫩軍記」熊谷陣屋の段 (1941)



近藤勇と鞍馬天狗 (1955)

土門拳  
生誕  
110年

# 鬼が撮った日本

2019年 7/19 [金] ~ 9/23 [月・祝] 会期中無休

- ◎開館時間 | 午前9時~午後5時(入館は午後4時30分まで)
- ◎入館料 | 一般430円 高校・大学生210円 中学生以下無料  
\*会員券(1年間有効) 随時受付、特典あり  
●特別会員10,800円(10人まで入館可)  
●普通会员2,160円(2人まで入館可)
- ◎協力 | 株式会社平凡社 ◎共催 | 酒田市教育委員会

8/31 (土)  
14:00~

Talk Event  
弟子が語る土門拳 [語り手] 堤勝雄  
\*参加無料(要入館料)

Ken Domon Museum of Photography  
土門拳記念館

山形県酒田市飯森山2丁目13(飯森山公園内)  
TEL/FAX 0234-31-0028 <http://www.domonken-kinenkan.jp/>



# 鬼が

土門拳  
生誕  
110年

土門拳と写真の出会いは24歳のとき、母親のすすめで上野の営業写真館で働き始めたことがきっかけでした。報道写真家こそ自分の目指す道と確信した土門は、昭和10(1935)年、名取洋之助主宰の日本工房に入社。対外宣伝雑誌『NIPPON』の仕事で日本の文化を撮影しました。

戦後にリアリズム写真を提唱した土門は、数多くのテーマに取り組み、膨大な数の作品をのこします。

長期構想の末に完成させた「風貌」、ライフワークである「古寺巡礼」「室生寺」、社会に訴えかけるルポルタージュの傑作「ヒロシマ」「筑豊のこどもたち」などよく知られたテーマはもちろん、ヌードを含む組写真など一風変わった撮影にも挑んだ土門。日本の美を追い求め続け、「写真の鬼」と呼ばれた彼の根底には「撮りたいものだけを撮る」という確固たる信念がありました。

生誕110年をむかえた今年、土門拳とはどのような人物だったのか、その作品からあらためて生涯をたどります。



文楽の撮影をする土門拳 (1943)  
撮影 三塚家義

## 土門拳の年譜

- 明治42年 0歳 ●10月25日、山形県飽海郡酒田町(現・酒田市相生町)に生まれる。
- 大正 5年 7歳 ●東京へ一家で移り住む。
- 大正 7年 9歳 ●横浜市に転居。
- 大正12年 14歳 ●神奈川県立横浜第二中学校(現・翠嵐高校)に入学。画家を志望する。
- 昭和 3年 19歳 ●中学卒業後、職を転々とする。この間、画家になることをあきらめる。
- 昭和 7年 23歳 ●全農全国会議の農民運動に参加し、検挙、拘束される。
- 昭和 8年 24歳 ●宮内幸太郎写真場の内弟子となる。夜間、写真の歴史と基礎理論を独学。報道写真家を志し、写真誌に応募する。
- 昭和10年 26歳 ●名取洋之助主宰の日本工房に採用され、宮内写真場を逃げ出す。対外宣伝雑誌『NIPPON』を中心に、日本の海外紹介パンフレットの写真を撮影する。
- 昭和13年 29歳 ●宇垣一成外相のルポ写真がアメリカの「ライフ」9月5日号に署名入りで掲載される。
- 昭和14年 30歳 ●日本工房を退社、外務省の外郭団体国際文化振興会の嘱託となる。中村たみと結婚。美術史家水澤澄夫の案内で初めて室生寺を訪れ撮影。以後、ライフワークとなる。
- 昭和16年 32歳 ●東京・新橋演舞場にて文楽の撮影を開始。2年間で約7千枚撮影、文楽の黄金時代を記録。
- 昭和18年 34歳 ●「対外宣伝雑誌論」を『日本評論』9月号に発表、宣伝グラフ誌を批判し、客観的真相に立脚した報道を提唱。雑誌は発禁処分になり、国際文化振興会を辞す。
- 昭和21年 37歳 ●室生寺を再び訪ねる。以後、京都、奈良の古寺巡礼を再開する。
- 昭和25年 41歳 ●アルス「カメラ」の月例写真審査員になり、アマチュア写真の指導を始める。選評の中でリアリズム写真を提唱。ブームと論議を巻き起こす。
- 昭和27年 43歳 ●木村伊兵衛と「カメラ」月例写真審査員を担当、合評連載。
- 昭和28年 44歳 ●「江東のこども」を撮り始める。写真集『風貌』(アルス)
- 昭和29年 45歳 ●第一期リアリズム写真の終了を宣言。写真集『室生寺』(美術出版社)
- 昭和30年 46歳 ●写真集『室生寺』により第9回毎日出版文化賞受賞。日本写真協会功労賞受賞。
- 昭和32年 48歳 ●初めて広島へ行き、原爆投下12年目のヒロシマの現状を目にし翌年まで広島に通いつめる。
- 昭和33年 49歳 ●写真集『ヒロシマ』(研光社)刊行、大きな反響を呼ぶ。写真集『ヒロシマ』により第4回毎日写真賞、第2回日本写真批評家協会作家賞受賞。
- 昭和34年 50歳 ●閉山した北九州筑豊の炭田地帯取材、炭鉱労働者の生活を記録。帰京後、過労のため、軽い発作で倒れて自宅静養する。
- 昭和35年 51歳 ●写真集『筑豊のこどもたち』(トリア書店)を刊行。10万部を売る。脳出血のため東京警察病院に入院。第10回芸術選奨受賞。第10回日本写真協会年度賞受賞。写真集『ヒロシマ』により東ベルリンの国際報道写真展で金賞受賞。

- 写真集『筑豊のこどもたち』により第3回日本ジャーナリスト会議賞受賞。カラー写真による「古寺巡礼」を本格的に開始する。筑豊を再訪、田川児童相談所取材。写真集『るみえちゃんはお父さんが死んだ』(研光社)
- 昭和36年 52歳 ●写真集『Hiroshima Nagasaki Document』(東松照明共著、原水爆禁止日本協議会)
- 昭和38年 54歳 ●豪華写真集『古寺巡礼』第一集(美術出版社 昭和50年第5集で完結)
- 昭和40年 56歳 ●写真集『信楽大壺』(東京中日新聞社)  
写真集『古寺巡礼』第二集(美術出版社)  
写真集『大師のみでら—東寺』(美術出版社)
- 昭和43年 59歳 ●10年ぶりに広島を訪れ、被爆者を再び取材。山口県萩市で取材中、脳出血で倒れ、九州大学付属病院に入院。写真集『古寺巡礼』第三集(美術出版社)
- 昭和44年 60歳 ●長野県鹿教湯温泉の療養所に移り、再起のためリハビリに励む。11月退院。以後車椅子で撮影する。
- 昭和46年 62歳 ●『古寺巡礼』により第19回菊池寛賞受賞。写真集『薬師寺』(毎日新聞社)  
写真集『古寺巡礼』第四集(美術出版社)
- 昭和47年 63歳 ●『ヒロシマ』がニューヨーク近代美術館パーマネントコレクションに収められる。写真集『文楽』(駸々堂出版)
- 昭和48年 64歳 ●紫綬褒章受章。写真集『東大寺』(平凡社)
- 昭和49年 65歳 ●『古寺巡礼』第五集のため、車椅子で撮影を始める。郷里山形県酒田市名誉市民第一号となる。写真集『古窯遍歴』(矢来書院)
- 昭和50年 66歳 ●写真集『古寺巡礼』第五集(美術出版社)
- 昭和51年 67歳 ●写真集『こどもたち』(ニコールクラブ)
- 昭和52年 68歳 ●エッセイ集『三人三様』(勅使河原蒼風、亀倉雄策共著 講談社)  
写真集『土門拳自選作品集』全三巻(世界文化社)
- 昭和53年 69歳 ●40年目にして初めての雪の室生寺を撮影。写真集『生きているヒロシマ』(築地書館)  
写真集『女人高野室生寺』(美術出版社)
- 昭和54年 70歳 ●脳血栓で倒れ、東京・虎ノ門病院に入院。以後、意識不明の状態が続く。
- 昭和55年 71歳 ●山形県酒田市に土門拳記念館の設立が決まる。勲四等旭日小綬章受章。
- 昭和56年 72歳 ●毎日新聞社が土門拳賞を制定。
- 昭和58年 74歳 ●10月、酒田市に土門拳記念館開館。『土門拳全集』(小学館)全13巻刊行開始(昭和60年完結)  
写真・エッセイ集『手—ばくと酒田』(土門拳記念館)
- 平成元年 80歳 ●写真集『土門拳の古寺巡礼』(小学館)全7巻刊行開始(平成2年完結)
- 平成 2年 ●9月15日、入院先の虎ノ門病院で心不全のため死去。

※2019年10月1日より、消費税率変更に伴い入館料、会員券料金が下記の通り変更となる予定です。  
一般440円、高校・大学生220円 普通会員券2,200円、特別会員券11,000円  
※計画変更により、当初休館としていた11月11日(月)~2月14日(金)も通常通り開館いたします。